

国産 mRNA コロナワクチン、第一三共が初の工場

2023年2月5日日本経済新聞



第一三共は 2024 年度までに新型コロナウイルスワクチンを年 2000 万回分生産できる体制を整える。国内企業が開発し承認申請した「メッセンジャーRNA (mRNA)」ワクチンの初の工場となる。厚生労働省はワクチンの定期接種の議論も始めており、新型コロナとの共存に向けたインフラ整備が進んできた。

子会社の第一三共バイオテック（埼玉県北本市）の工場生産する。既存のワクチン工場を一部改修し、mRNA の原薬や主成分を包んで体内に運ぶ物質などの生産設備を導入した。塩野義製薬や KM バイオロジクス（熊本市）も mRNA と別の方式の国産ワクチンを開発中で、主要国内 3 社の最大供給能力を合算すると 1 億本を超える。

新型コロナワクチンは米ファイザーやモデルナが mRNA ワクチンを開発したが、流行初期にはいずれも海外からの調達で日本は確保に苦戦した経緯がある。日本で開発・承認した製品の生産が進むことでワクチンの自給体制がさらに進むことになる。

国産ワクチンの生産準備が進む

企業名	種類	工場	生産能力	開発
第一三共	mRNA	埼玉県北本市の自社工場	年2000万回規模	23年1月申請
塩野義製薬	組み換えたんぱく	製造委託先の岐阜工場や、子会社の秋田工場など	年6000万回以上	22年11月に申請
KMバイオロジクス	不活化	熊本県菊池市の自社工場	年最大2000万回	23年4～6月申請予定

第一三共は23年1月に開発中の新型コロナワクチンを承認申請した。最大生産能力を徐々に高める。政府の補助金を活用し27年度までに mRNA ワクチンの製造棟をさらに同工場に建設予定だ。

実際の供給量は政府との契約で決まるが、新型コロナがさらに長期化し、インフルエンザのように定期的にワクチン接種が必要になる場合にも対応できるようにした。平時には別のワクチンをつくり必要時に対応する mRNA ワクチンを製造することを想定している。

既にコロナワクチンを承認申請した塩野義は mRNA とは別の、遺伝子組み換えでつくったウイルスの一部を活用した「組み換えたんぱくワクチン」の生産体制を整備中だ。製造委託先のユニジェン（岐阜県池田町）と組み、年6000万回以上の生産体制を構築する。子会社UMNファーマ（秋田市）などの工場も活用する。

明治ホールディングスグループの KM バイオロジクスは、熊本県菊池市の研究所に年最大2000万回の生産設備を用意した。23年6月までにウイルスの毒性をなくした成分でつくる「不活化ワクチン」で承認申請する予定だ。